

流されて事治まる、時に高倉天皇の治承元年なり。かくて此密謀は遂に失敗に歸したるも、實に平氏を討たんとせし魁として一顧すべし。然るに此事亦法皇にも御關係ありとの疑ありて、清盛は法皇を幽し奉らんと考へ、一族皆武装して西八條、第に集まりしに、重盛は獨り平然烏帽子直垂の装ひにて清盛の許に至り、父の前に膝まづき、涙を振ふて其不法を諫めて曰く、強いて其不忠の擧を遂げんとせば、請ふ先づ重盛の首を斬て發し給へと。流石清盛も其熱誠に感じて、遂に其擧を思ひ止まりたりき。實に重盛は資性温厚頗る沈着なり。嘗て中宮に候する時偶々蛇の來るをば、中宮を驚かさんことを恐れて、靜かに袖もて之を包みて源仲綱なかづなに渡し、仲綱も亦平然として之を受けたるが如き、その一端を知るべし。殊に文武兼ね備はれる上に、忠孝の志頗る厚く、事毎に大義を説きて父の専恣を諫止し、驕暴なる清盛も、重盛存命の間は之に憚りて心の儘の振舞を肯てせざりしは、如上の一例によりても知るべし。斯くて内外に望を屬せられ一族の間に頗る重きをなしたりし重盛は、居常父の跋扈を憂懼して、不幸病を得、程なく治承三年早世したりしかば、是より清盛は最早や憚る所なく横暴を恣にするに至り、既に重

平重盛



中古 第二十九章 平氏の全盛及びその滅亡

盛の薨ずるや、後白河法皇は關白基房もとぶ、基實の弟と謀りて、直ちに重盛の所領越前を收公したれば、清盛は怒りて、兵を率ゐて福原より上京し、關白基房の官職を解きて太宰權帥に左遷し、之に代ふるに己が女婿基實の子基通を以てし、其外法皇に親近する三十餘人の官職を奪ひて、畏くも法皇をば鳥羽殿に幽閉し奉るに至り、愈々上下の人望を失して、その衰亡を早むるに至りしなり。爰に於てか平氏は既に藤原氏の故を襲ひて漸く文弱となりし上に、又斯かる驕恣を逞にして皇威を輕んじ奉りしは、愈々その衰亡を招きし二大原因たることを生徒をして顧慮せしめざる可からず。而してその爰に至りしは、重盛の如き忠孝兩全の人物を早く失ひしが、確かに同家の一大打撃たりしことを知らしむべく、重盛が假令父の意に忤るとも之を切諫して其不忠を遂げしめざりしは、なほ至孝とすべ

く、忠孝一致は我國の如き國體にして始めて唱道し得べきの理を知らしめざる可からず。教授者宜く挿畫清盛重盛父子の肖像を對比して、此一節の教訓を徹底せしむべし。清盛の肖像は攝津國築島寺（又來迎寺とも稱し前送講あり）の所藏によりて寫したるものにて、甲冑に身を堅めて、勇威の相貌眉宇の間にあらはれ、重盛の肖像は山城國高雄神護寺の所藏にして、當代肖像畫を以て有名なる藤原隆信の筆に成り、その温乎たる風貌は東帶の裝ひと共に其眞を寫せるものなるべく、父子相對する間に、自からその性格を看得すべし。宜しく之を利用して兩者の印象を深からしめ、殊に重盛の忠孝兩全を力説するは、國民教育上の一要件たりとなす。

尚挿畫により便宜清盛の武裝に就て、其名所の大略を指示せん。

二さて清盛の朝家に對し奉りて斯かる不遜なる行動は愈々衆望を失ひ、上下の憤を招きしかば、此機に乗じて率先平氏を討

平 清 盛

三、源賴政の舉兵



たんと謀りしは源賴政なり。賴政は源賴信の兄賴光の玄孫にして、（第二章氏系圖）嘗て平治の亂に義朝始め同族と行動を共にせざりし爲め、其家獨り全きを得て、爾來清盛の恩顧を被り、官位漸く昇進し、清盛の取成によりて遂に從三位の高位を辱くし、世に源三位と稱せらる。されど爾來平家の驕暴は日に長じて、源家の再興復た期し難きを見ては、一矢之に報いんと、の念漸く長ぜしに、偶々清盛の強暴は極度に達し、法皇の幽閉公卿の流竄等、朝廷に對する不遜を見ては最早や忍ぶ能はず、諸國に残存せる諸源を糾合して之を討たんと謀れり。恰も後白河法皇の第三皇子以仁王（高倉宮又は三條宮と云ふ）が聰明なるに兎角不遇におはすを以て居常鬱々たれば、賴政は王を擁して、王の令旨を請ひ受けて、源行家等をして之を諸國の源氏に傳へて所在舉兵せしむ。然るに諸國の源氏未だ集まらざる中に、既に事發覺せしかば、以仁王は俄かに江州園城寺に逃れ、賴政も手兵を率ゐて續いて園城寺に走りて王に合したるに、寡兵にて到底對抗すべからざるをはかりて、王を奉じて更に南都に走らんとし、平家の追撃軍と宇治橋に會戦し、僧兵等奮闘せしも遂に敗れて、賴政は平等院に入りて自刃し、王は敗走の途中流矢に中りて薨じたま

へり。時に治承四年(一八四〇)五月にして、賴政等死する時未だ三十歳、その辭世の歌に「埋木の花咲く事もなかりしに、みのなるはて(實の熟る果てと身の成果との兩義をかく)ぞあはれなりける」とある如く、實に浮沈の一生を過して、遂に花咲く春に遭はずして、あはれ落命したるものなれど、此舉兵は後世に影響する所頗る大にして、賴政の傳へたる以仁王の令旨は、諸國に潜める諸源をして並び起たしむる動機を興へ、爾來平氏は年と共に衰亡に傾くに至りしなり。

四、源賴朝の舉兵

賴政の舉兵が動機となりて諸國の源氏之に響應し、東國・北國の外にも、近江・河内・九州・四國・紀州等諸州の源氏黨續いて兵を舉げしを以て、平氏は左面右顧之が鎮定に疲れ、遂に滅亡の已むを得ざるに至りしと雖も、就中その中心をなすは東國の賴朝と北國の義仲なれば、普通教育に於ては此二面を説くを以て足れりとなす。まづ義朝の第三子賴朝は、嘗て平治の亂に敗れて、東國に赴かんとして、途に平氏の爲めに捕はれ、將さに殺されんとせしを、清盛の繼母池・禪尼の爲めに救はれて、伊豆・蛭ヶ島に流されたるは、恰も平治亂の翌年にして、賴朝が僅かに十四歳の弱冠なりき。爾來廿餘年の間、同國北條に占據せる地方の豪族北條氏と結托して、時政の子政子を娶り、私かに時

機の到來を待ちしが、恰も治承四年賴朝が卅四歳の春、源行家が以仁王の令旨を齎らすに及びて大に喜び、時政等と謀りて同年八月伊豆に旗上げし、先づ軍の手始めとして、同國山木(ヤマキ)にありて威勢ある平兼隆(カネタカ)を伐ち亡ぼし、續いて石橋山(イシハシ)に平家の將大庭三郎景親等と戦ひて却て大敗し、一時箱根山中に身を潜めしが、更に眞鶴崎(マナヅク)より房州に渡りて、房總の諸豪を招き、上總介平廣常下總の千葉常胤等之に應じ、別に北條時政をして甲信の兵士を募らしめ、賴朝は房州を發して行くゆく房總・武相の諸族を誘致して、兵勢大に張り、十月相州鎌倉に達して居を茲に構へたり。清盛之を聞き大に驚きて、孫維盛(コノエノ盛)の重盛(ヒロノ盛)弟忠度(タカヒコ)陸奥守等をして赴き討たしむ。賴朝乃ち大兵を率ゐて鎌倉を發し、軍を西に進めて之を迎撃せんとし、駿州黃瀬川(キウノセガハ)に至るや、偶々さきに命を受けて募兵に赴きし北條時政は、甲信の兵を引率して之に來會し、兵勢大に張り、進んで富士川を挟みて平家の討手と相對持せしが、甲斐源氏武田信義等(タケノモリ)は、夜半川を渡りて敵の背後に出でんとするや、河邊に眠れる幾千の水禽は、軍馬の物音に驚き騒ぎしかば、かねて武勇勝れたる東國の大勢に心馳したりし平軍は、忽ち起る水禽の羽音に、すは敵軍の襲來と誤解して、全軍



狼狽戦はずして、軍器輜重を棄て、西走せり。頼朝は此勢に乗じて敵を追撃せば、上洛或は易々たるものありしならんも、千葉常胤三浦義澄等の諫により、頼朝は復た軍を鎌倉に班して、根據を此地に置き、東國を堅めて實力を養成したる後、徐ろに西上せんと決し、鎌倉にかへりて東國の確保に着手し、持重して容易に動かざりしなり。
(なほ鎌倉に據る理由に就ては更に述ぶべし) さて頼朝の富士川に勝ちて師を鎌倉に班す時、偶々其弟義経は黄瀬川の陣に兄頼朝に來會せり。義経幼名を牛若丸と云ひ、義朝の第九子なり、平治の亂後僅かに二歳にして敵に捕へられしも、特に死を赦されて鞍馬寺に居り、稍や長じて自家の系圖を寺中に見るに及びて大

五、源義仲の舉兵

に感奮し、他日必ず平氏を滅して源家を恢復せんと志し、十六歳の時遂に陸奥に脱走し、父祖以來源氏と關係淺からざる平泉の藤原秀衡に客とし、遙かに時機を待ちしに、今頼朝の舉兵を聞き、秀衡に勸めて赴き援はんとせしも、秀衡容易に應ぜざるを以て、義経は決意して借に平泉を出で、今や頼朝の陣營に來會し、永年の再會に往にし、後三年の役に於ける義家義光兄弟の昔を偲び、兄弟相擁して泣けりと云ふ。又義経の兄にて義朝の第六子なる範頼も幼より藤原範季に養はれしが、又頼朝の舉兵を聞て來會したる等、頼朝の骨肉を始め東國の諸豪は多く頼朝の許に馳せ參じて、忽ち東國を風靡するに至れり。是れ全く東國は頼朝の父祖以來源氏の恩威並び布きし故地なりし爲めなると、又一は主將頼朝が廿餘年の長日月自重して伊豆の邊陲に潛み、今又富士川の大勝にも、なほ西上に急がずして、是より更に鎌倉に占據するが如き甚大の忍耐力は、乃ち他日の大成を遂げし所以にて、是れ又平氏の間もなく滅亡せし他動的二大原因にして、さきに述べたる平氏の自動的二大原因と相待ちて力説を要する事たり。
 かゝる際に北國に於ては、源義仲舉兵して軍氣大に振へり。義仲は義朝

の弟義賢の子にして、(第二十八章) 僅か二歳の折父義賢は義朝の長子義平の爲めに殺されしを以て、信濃權守中原兼遠が義仲の乳母の夫たる關係より、其庇護を受けて、同國木曾の山中に鞠養せられ、木曾冠者の稱あり。長じて益々勇武、源家の復興を志し、治承四年以仁王の令旨を得るに及びて兵を信州に起したりしが、下野、足利、甲斐、武田氏等諸源來屬して兵勢大に振ひ、翌養和元年平氏の黨與越後の住人城氏を破りて其國を從へ、更に平氏の討手を越前に破り、悉く附近の諸豪を風靡して眞に旭日の隆勢を示し、越えて壽永二年五月平維盛等の討手と越中、礪波山に戦ひ、義仲夜陰に乗じて敵營を襲ひ、平軍騷擾して大敗し、俱利伽羅谷に陥りて積屍累々谷を埋め、維盛等辛ふじて身を以て免れ、京都に通じ、賴朝が靜かに銳を鎌倉に養ふ間に、義仲は勢に乗じて追撃して京都に向ひ、既に叡山に達して京都を突かんとせり。時に京都に於ては、平清盛は是より先き養和元年病を以て薨去し、その子宗盛後を襲ぎて政務を執りしが、義仲等の來り迫るに及びて大に之を恐れ安徳天皇、建禮門院を奉じ、三種の神器を擁して九州に走りたれば、義仲代りて直ちに入京し、後白河法皇より其功を賞せられ、平氏追討使を命ぜられしも、

義仲は其行賞賴朝に及ばざるに不平にて、兎角不遜なりし上に、又その軍規嚴肅ならずして、兵士亂暴の行爲多く、或は公領を犯し或は人民を劫掠するを以て、漸く法皇の御歡忌を蒙りしかば、義仲は一旦平氏の追討に向ひしも、間もなく歸京して、法皇の法住寺殿を圍み、法皇に強請して攝政基通を罷めて、己と親しき基房の子師家を以て代らしめ、此他法皇の親臣及文武諸司多數の官職を剝ぐ等驕暴なる行多かりしかば、法皇は益々意を賴朝に屬したまひ、義仲は到底賴朝と兩立すべからざる勢となり、賴朝は二弟範賴、義經に命じて義仲を討たしむ。義仲之を宇治、勢多に防ぎしが、宇治川に於ては、賴朝の勇將佐々木高綱は賴朝より賜はりたる名馬池月に乗り、同く恩賜の駿馬磨墨に騎したる梶原景季と先登を争ひたる美談は人口に膾炙する所なり。かくて此方面まづ破れ、勢多の防守も亦解けて、義仲頗る奮闘せしも叶はず、再び北陸に赴かんとし、馬を江州栗津原の水田に騎り入れ、流矢に中りて討死したり、時に壽永三年正月なり。爰に於て源氏の東西二中心の一は全く消失して、獨り東國の中心のみを存するに至りしが、賴朝、義仲の兩雄は到底兩立する能はざるの勢なりしとは云へ、義仲の此敗亡は、畢竟驕暴に

六、平氏の滅亡

いて朝廷に對する不敬の態度が遂に此討死を免れざりし所以を會得せしめざるべからず

さて先きに九州に走りたる平氏は、一旦筑前太宰府に據りて、九州の兵を徵せしに、西國は豫ねて平氏の勢力を布きし地とて、其諸豪族は多く之に應じ、諸將は九州の東北海岸を遮斷して門司の海峡を占領して、山陽南海の咽喉を扼し、瀬戸内海一帶に勢力を振ふに至り、宗盛等は天皇を奉じて再び讃岐屋島に返り、行宮を建て、之に據り、備中播磨等に於て義仲行家の討手を破り、大に勢を挽回せしが、既にして義仲は頼朝と不和を生じて範頼義經と近畿に争ひし爲め、平氏を顧みる暇なかりし間に、平氏は再び勢を得て、義仲の誅滅後問もなく、更に平家に因縁深き福原に進みて此に城き生田、森を東門一ノ谷を西門として防備に努めたりしが、義經範頼は義仲を滅したる勢を以て福原に迫り、範頼は生田、森に、義經は一谷に向ひしが、義經は別に輕騎を率ゐて鶴越の險路を下りて、不意に敵の背後を撃ちしかば、平氏支ふる事能はず、宗盛等は再び天皇を奉じて屋島に逃れたり、時に壽永三年二月なり。此一谷の戦に、關東の勇將熊谷直實が平家の公達平敦盛を討取りしは有名

赤間の宮



中古

第二十九章 平氏の全盛及びその滅亡

三五七

なる逸話にして、敦盛が折角海上に騎り出でながら、直實がかさす扇に呼び返されて、弱冠ながら、敵に後を見せじと再び馬首を返したる健氣さ、又は熊谷が戦場の慣ひとは云へ、涙を抑えて之を斬りし情け等、双々當代武士の心情の床しさを語る美談、たらずんばあらず。それより範頼は更に平家追討使として、豫め九州に至りて平家の西走上陸を拒まんとし、又義經は壽永四年(一八四五)二月暴風を冒して攝津波部の津を解纜して、屋島に向ひ、附近の民屋を燒きて急に之を攻めしかば、宗盛は天皇を奉じて再び海に浮びたりしが、此時那須餘一が平家のかさす扇の的に適中して家名を揚げ、義經の臣佐藤繼信が身を以て主人を庇ひて敵の強弓に射殺せられしが如き美談は、便宜之を挿みて教訓の資となすべし。かくて平氏は西走して九州に上陸せんとするも、範頼既に豊後にありて

上陸するを得ず、已むなく船を返して長門、壇浦に泊せり。義經急に之を追撃して、八百餘隻の大軍を率ゐて、範頼がかねて周防に留め置き、海峽の地理に精しき三浦義澄を先導として之に迫り、平家も知盛等五百餘隻を以て決死之に當り、同年三月廿四日大に壇浦の海上に戦ひしが、義經の海軍多数なる上に潮流を利用して急に突撃し、平氏遂に大敗して、その同族皆潔き最期を遂げたるが、唯宗盛及其子清宗等は捕はれて鎌倉に押送せられ、後に近江に斬らる。又此際畏れ多くも御齡未だ八歳にまします安徳天皇は清盛の未亡人二位、尼に抱き奉られて海中に投げ給ひしが、頼朝は豫ねて天皇に御意あらせられぬ様希ひて、嘗て懇々範頼に諭す所ありしが、勢遂に茲に至りしは畏れ多き事限りなし。挿書赤間の宮は下關市宇阿彌陀寺町にあり、安徳天皇此浦に崩じ給ひしより、後建久二年其冥福を祈り奉らん爲め、阿彌陀堂をここに建て、天皇の御影を安置したりしが、明治維新後寺を廢して神社となし、同八年赤間の宮の號を奉りて官幣中社に列す。域内に天皇の御陵及び平家一門の古碑と傳ふるもの數多残存し、又有名なる長門本平家物語及び源平合戦屏風等幾多の社寶を珍藏し、以て當時を追憶するに足れり。

壇ノ浦附近の圖



中古 第二十九章 平氏の全盛及びその滅亡

三五九

宜しく此圖によりて、天皇の勿體なき御最後を追吊し奉るの念を喚起すべし、又此時三種の神器中劍は海中に沈みて遂に出でず、此後清盛殿の御座劍、後土御門天皇の時伊勢より御劍を奉りて此を神器として以て今日に及べり。義經は建禮門院及鏡璽の二器を奉じて歸洛し、嘗て後白河法皇が立て、天皇と稱し給へる安徳天皇の御弟、始めて神器を受けて即位し給へり、之を後鳥羽天皇となす。故に壽永四年三月迄は安徳天皇の御代にして、後鳥羽天皇の御代は方さに安徳天皇の崩御以後に接するを以て正當となすべし。尚ほ以上數節を説くに當りては、必ず挿圖源平時代戰地圖を使用して、一々地理を指示して的確なる説明を試みらるべく、又挿書壇浦附近圖を示して、平家二十餘年榮華の夢の一朝にして消えたる往時を偲ばしむべし、圖中右方海中に點出せる二島は滿珠(右)干珠(左)の二島にして、此東方の二島より西方に達せる下關海峡東口の北岸

一體三十餘町の間を壇浦と稱するものにして、(四)の左は北、右は南、前は西、奥は東源平の合戦は實に此二島より西方に互れる一帯海峡に於て演ぜられたるを知らしめ、驕る平氏の遂に久しからざる榮枯の理法を悟るに便ならしむべきなり。なほ此時は王政が武家政治に遷る一大變期なれば、此壽永四年(一八四五)の紀年は必ず生徒に記憶せしめざるべからず。

第四期 概括

(一)第三期に於て藤原氏大に跋扈したりしかば、本期に入りて叡明なる後三條天皇之を抑へ給ひ、その御遺志を繼ぎて白河上皇始めて院政を開き給ひしを以て、政權院中に移りて天皇は政權を失ひ、藤原攝關家も從て實權を失ひたれば、實に政體の一大變期なりとす。(二)然れども白河上皇の院政は僧侶の跋扈を來して、之を鎮定するに武士を用ふるの必要起り、又次で地方に後三年、役中央に保元平治の亂等續發して、爲めに武士の益々重んぜられて、社會上の位地を愈々高むるに至り、(三)その結果は、武士が藤原攝關家に代りて實力を獲得し、中にも保元平治の大亂に於て、源氏は全く衰へて一時平

氏の勃興を致せり。(四)然れども亦平氏は隆盛につれて驕奢を極めたるため、程なく源氏に滅されて、愈々源氏の武家政治の創立となり、こゝに政治界の一大變動に遷り行くなり。

中古略年表

中古略年表の作製は、なほ上古のそれと同く、第一期(律令)第二期(奈良)第三期(平安)第四期(院政)の各期を分ちて、重要な事項を表し、内治外交を書き分け、たれば各期講説を進むるの際之を利用するは勿論、今中古時代を終るに當り、此年表を利用して、更に此時代を通じて時代の推移を概括せしむるに資せられんことを望む。

中
古
史
終



中古略年表

第三期							第二期中 (奈良時代) 〇七約						第一期中 (改新時代) 〇六約						御代 數			
五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八		三七	三六	
清和	文德	仁明	淳和	嵯峨	平城	桓武 <small>(二四四)</small>	光仁	稱徳	淳仁	孝謙	聖武	元正	元明 <small>(二三六)</small>	文武	持統	天武	弘文	天智	齊明	孝徳 <small>(二二五)</small>		
			一四九〇	一四七〇		一四五四					一四〇一		一三七〇	一三六一						一三〇五		
長房始めて攝政となる	藤原長房始めて太政大臣となる		天長七年檢非違使廳を置く	弘仁元年藏人所を置く	空海眞言宗を傳ふ	延暦十三年平安京都坂上田村麻呂蝦夷を平ぐ 最澄天台宗を傳ふ	道鏡を貶す	和氣清麻呂道鏡をくじく	藤原仲麻呂反す		渤海の使始めて來る 藤原廣嗣反す	日本書紀成る	和銅三年奈良貸郡西南諸島來屬	大寶元年大寶律令成る				新羅唐と共に百濟を滅す 唐、高句麗を滅す 近江朝の新政	阿倍比羅夫蝦夷及び肅慎を伐つ	大化元年年號の始 大化の新政を行ふ		
第四期中 (院政時代) 〇二一約							平安時代 (安時代) 〇九二約														御代 數	
八一	八〇	七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一		六〇
安徳	高倉	六條	二條	後白河	近衛	崇徳	鳥羽	堀河	白河 <small>(二七八)</small>	後三條 <small>(二七五)</small>	後冷泉	後朱雀	後一條	三條	一條	花山	圓融	冷泉	村上	朱雀	醍醐	
			一八一九	一八一六				一七四六					一六七九								一六〇〇	一六〇一
治承四年源三位賴政兵を擧ぐ		平清盛太政大臣に任ぜらる	平治元年平治の亂	保元元年保元の亂				應徳三年院政始まる 後三年の役平定す	記録所を置く	前九年の役平定す			寛仁三年刀伊の賊來寇 平忠常誅せらる	藤原道長全盛を極む							菅原道真貶せらる 古今集成る 兼海亡ふ	高麗、新羅を滅して朝鮮半島を統一す 天慶三年平將門誅せらる 天慶四年藤原純友誅せらる

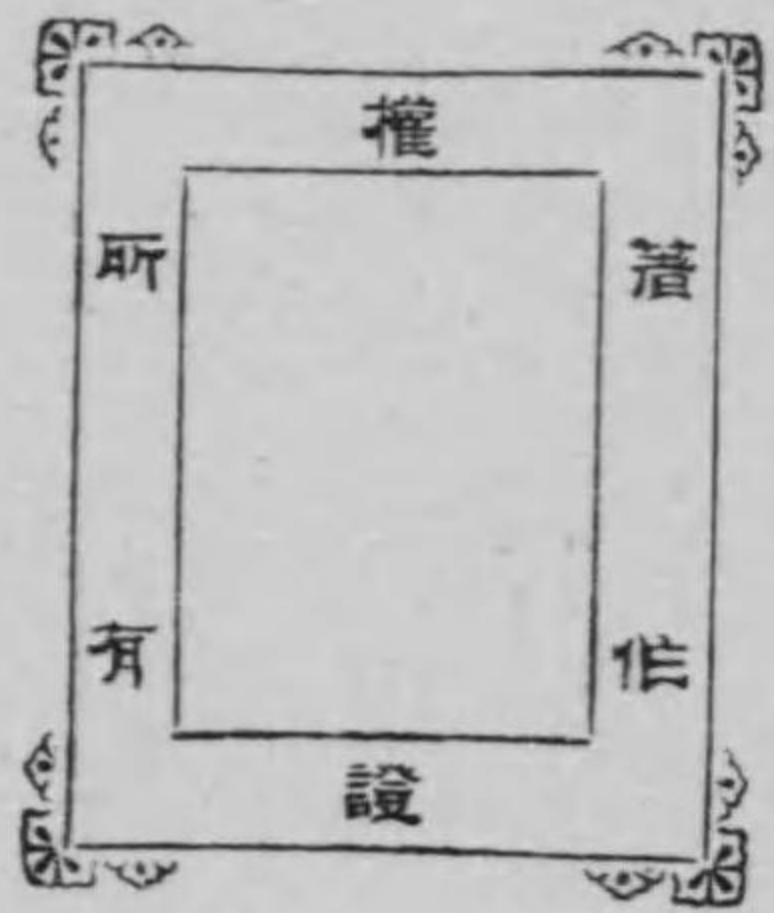
中 古 略 年 表

第三期										第二期 (代時良奈)						第一期 (代時新改)						御代 天皇	紀元	重なる事項
五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八			
宇多	光孝	陽成	清和	文徳	仁明	淳和	嵯峨	平城	桓武	光仁	稱徳	淳仁	孝謙	聖武	元正	元明	文武	持統	天武	弘文	天智	齊明	孝徳	
一五五四						一四九〇	一四七〇		一四五四					一四〇一		一三七〇	一三六一						一三〇五	
藤原基経始めて關白となる 寛平六年遣唐使を止む			眞房始めて攝政となる	藤原眞房始めて太政大臣となる		天長七年檢非違使廳を置く	弘仁元年藏人所を置く	空澄眞言宗を傳ふ	延暦十三年平安奠都 坂上田村麻呂蝦夷を平ぐ 最澄天台宗を傳ふ	道鏡を貶す	和氣清麻呂道鏡をくじく	藤原仲麻呂反す		渤海の使始めて來る 藤原廣嗣反す 天平十三年諸國に國分寺を建つ	日本書紀成る	和銅三年奈良奠都 西南諸島來屬	大寶元年大寶律令成る			新羅唐と共に百濟を滅す 唐、高句麗を滅す 近江朝の新政	阿倍比羅夫蝦夷及び肅慎を伐つ	大化元年年號の始 大化の新政を行ふ		

第四期 (代時政院)										安平 (代時安平)										御代 天皇	紀元	重なる事項
八一	八〇	七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二			
安徳	高倉	六條	二條	後白河	近衛	崇徳	鳥羽	堀河	白河	後三條	後冷泉	後朱雀	後一條	三條	一條	花山	圓融	冷泉	村上	朱雀	醍醐	
一八四五	一八四〇		一八一九	一八一六				一七四六					一六七九							一六〇〇	一六〇一	
源義仲敗死す 壽永四年平家壇浦に亡ぶ	治承四年源三位頼政長を擧ぐ 源義仲敗死す		平清盛太政大臣に任ぜらる	保元元年保元の亂				應徳三年院政始まる 後三年の役平定す	記録所を置く	前九年の役平定す			寛仁三年刀伊の賊來寇 平忠常謀せらる	藤原道長全盛を極む					宋起る	高麗、新羅を滅して朝鮮半島を 統一す 天慶三年平將門謀せらる 天慶四年藤原純友謀せらる	菅原道真貶せらる 古今集成る 勃海亡ぶ	

大正十年六月十日印刷
大正十年六月十三日發行

國史教授精義(上卷)
定價金四圓八十錢



著者 藤岡繼平
發行者 東京市日本橋區鐵砲町三番地 合資會社 六盟館
右代表者 杉本七百丸
印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市日本橋區鐵砲町三番地 合資會社 六盟館
電話 振替口座東京二二五五〇番
販賣所 全國府縣下各書肆

(社會式株印局三 地番五十二町弓馬橋京市京東 所刷印)

合資六盟館
發行圖書
大販賣所

東京市京橋區
南條馬町二丁目
電話東京二一六三番
振替口座東京二八〇九番
目 黒書店

東京市日本橋區
橋本町
電話神田一三三三番
振替口座東京三〇九〇番
榊原書店

東京市日本橋區
本石町二丁目
電話本局一六九八番
振替口座東京五六一三番
杉本書店

長岡市表四ノ町
電話長岡一八番
振替口座東京三六一九番
目 黒十郎

長野市大門町
電話長岡二二四番
振替口座東京一〇七〇番
西澤本店

263
6
68

終

